

# Views from Orienteering

村越 真

オリエンテーリングで培ったナビゲーション技術を日本社会に提供し続けると同時に世代交代の必要性を強く感じた。

## view10 石造りの家

2001年に刊行した「最新読図術」は、「発売忽ち重刷」の好評を博した。専門家集団からも高い評価を得た。それをきっかけに、多くの講習会や講演会をする機会を得、山岳関係者と交流する幸甚に恵まれた。それでも5年も経つと、もっとよいものにするための材料が集まってきた。

仕事から、アメリカの心理学テキストをよく目にする。これらのテキストには年月を経て版を重ねるものが多い。学問の世界は日々進歩するから、その成果を生かして教科書が改訂されるのは当然だが、その背後には出版社が許すだけの売り上げと同時に、著者の執筆に掛ける強い熱意と意志が必要だ。

本を作る時、構想段階はいつも楽しい。あれも書こう、今度はこれを書こうなどと考えながら、アウトラインを作るのは至福の作業だ。ところがそれをいざ人様に見てもらえる文章にする時、自分自身の語彙の貧困さと表現力のなさ、細かい事実関係の確認という面倒な作業に直面する。改版の過程は構想の楽しみのない苦行のようなプロセスだけが待っている。アメリカの心理学の教科書には30年にわたって15版を重ねているものもあれば、最初の執筆者の名前を冠しているものの、すでにその人は引退し、別の執筆者によって書き継がれているものさえある。アンダーソンという著名な研究者の認知心理学の本の4版をすっかりなくしてしまい、仕方なく買い直したのは第7版だった。読んでみてびっくり。元の版も相当いい本だったが、さらいウィット効いた本になっていた。相当忙しいはずの一流の研究者が本を少しづつ改訂し、使い続ける。古いヨーロッパの町並みを、内装だけをリフォームしながら住み続けているような頑固さと意志を感じさせる。

翻って、日本の本はまさに木造建築。



香港のジュニアチームやコーチたちとともに、30周年記念パーティーにて。日本も世代交代を進めなければと、痛切に思う

次から次へと新しい本が出る。本来教科書的に読み継がれる本でも、改版されるでもなく、放置された古民家のような状態になっているものも少なくない。「最新読図術」のようなく改版の企画が通ったのが昨年の夏。結局は改版ではなく新しいシリーズの一冊に入ることになってしまった。日本の出版界には「改築」という発想が乏しく、それが年月を経て残る優れた本の出現を阻んでいるのかもしれない。

原稿はとうの昔にできていたが、同シリーズの「山岳気象大全」を、著者猪熊さんが気合いで500点を超える図表入りで作ったものだから、デザイナーがパニックし、そのしわ寄せがこちらにきた。後発のこちらは遅れに遅れ、ようやく9月27日に校了。本来著者校は終わっているはずだが、担当編集者の仕事ぶりがあまりに頼りなく、東京に出かけて行って自ら校了した。チーフ編集者曰く、「このシリーズは本当にどの本も大変で、村越さんの本が楽に感じられましたよ。たいいてい一冊上がると誰かが精神的に参るんです。」半年も前にできていた原稿は編集者の手も入らず店ざらしにされ、最後になって編集チェックが入ったり、付録をつけることになって急遽その材料と文章を作成したり、その間別の本の作成が2

ヶ月の短期で入ったりと、随分大変だった。一番参っていたのが著者自身だったかもしれない。

メンタルヘルスを削ってできた「山岳読図大全」は、旧版「最新読図術」を持っているオリエンティアにもぜひ読んでほしい出来に仕上がった。内容を見比べれば、オリエンテーリング界に蓄積されたナビゲーション体系が、登山の中で堂々と地位を確立したことを感じとることができるだろう。



5 年以上の構想を経て「改築」された「山岳読図大全」。「石造りの家」として、今後長く登山界のスタンダードになることを期待したい。

## View 11 香港との四半世紀

今年創設 30 周年を迎える香港オリエンテーリング協会は、限られたテレビンにもかかわらず、常にアジアをリードしてきた。1988 年に開催したワールドカップはアジア初だった。日本がワールドカップを初めて開催するのはそれから 12 年もしてからだ。2004 年には、「アジア・シティー・オリエンテーリング選手権 (ACOC)」と称した大会を開催した。アジア選手権への道のりはまだその時は遙かに見えたが、「アジア・選手権」の名も冠したい。そんなジレンマを解決するアクロバティックな発想には驚いた。その 2 年後の 2006 年に最後のアジア環太平洋選手権を開催し、この時のアジア諸国会議で、翌 2008 年からアジア選手権が開催されることに決まった。ACOC の発想がその後押しになっていたことは間違いない。

その間、僕がアジア初の IOF 理事に選ばれた。1990 年代後半の活動から、いつかは IOF 理事をすべきだとは思っていたが、僕がその決意を決めたのは当時会長のアルバートが「僕が理事になるべきだ。推挙する」と言ってきたからだ。1994 年以来、香港との間でジュニアの交流合宿を続けてきたことも、その評価の大きな一因だったのだろう。

それから 10 年、国際大会の開催やアジア全体の活動の活性化で、彼らと苦楽を共にした。今回のワールドランキングイベントでも、やはり彼らに先を越されたわけだが、相互に考えが同期するようになってきた。「アジアで年間数回の WRE を開いて、相互に行き来する。」それが僕と彼らの共通した考えであり、それによってエリートに活躍と切磋琢磨の場が提供できるようになる。

1996 年の APOC の後、空港に送ってくれたパトリックが力なく僕の手を握り、「もし中国連盟に吸収されるようなことがあれば、僕らは生き残れない」と言ったが、香港のオリエンテーリングはその時には考えられない発展を遂げた。昨日ジオパークにでかけた時、20 年来の友人のパトリックがふともらした。「いつもは、オリエンテーリング大会だけで帰ってしまうから、こうやって観光に連れて行ってあげることもなかったなあ。」確かに、食事を除けば、二人で一緒にオリエンテーリング以外

のことをするのは初めてだった。

1988 年に日本で開かれた国際大会の時、僕は前日に食べたカキにあたって、レースはぼろぼろだった。ゴール時の慚然とした表情の写真が、大会後パトリックから送られてきた。裏に「try again! Shin」と書いてあった。彼がその写真を送ってくれなければ、僕らの仲は深まることもなく、香港のオリエンティアたちと深い関係になることはなかったかもしれない。大会終了と香港連盟 30 周年記念を兼ねたバンケットの主賓席に座ると、その席には 20 歳代から 30 歳代前半の若々しい顔が半分以上を占めていた。現在の香港協会の理事の多くが、そうした若い世代だ。日本も世代交代を進めて、新しい世代同士の交流が進むことを期待したい。

(村越 真)



ジオパークの見学で、珍しく香港でオリエンテーリングとは関係ない休日を過ごした。手前から筆者、フィ夫妻(一番奥は無関係者)